

小学校外国語における児童の動機づけと エンゲージメントの関連性 —自己決定理論に着目して—

染谷 藤重

The Relationship Between Students' Motivation and Engagement in Elementary School Foreign Language Education: A Focus on Self-Determination Theory

Fujishige SOMEYA

Accepted June 13, 2023

抄録：本研究では、小学校外国語における児童の動機づけ要因とエンゲージメントの関連性を明らかにすることを目的とする。動機づけ要因としては、自己決定理論における認知的評価理論及び基本的心理欲求理論の観点から論じ、エンゲージメントとしては、感情的・行動的・認知的エンゲージメントに関して取り上げる。小学校 5、6 年生 610 名にアンケートを実施し、分析を行った結果、教師の自律性支援指導の認知が授業の心理的欲求を充足させ、エンゲージメントを予測するということが明らかになった。この結果を基に、今後の小学校外国語の授業に必要な視点に関して示唆を行った。

索引語：動機づけ、自己決定理論、エンゲージメント、小学校外国語

Abstract: This research aims to explore the connection between students' motivation and engagement in elementary school foreign language education, with a specific focus on self-determination theory (SDT). Motivational factors are examined through the lens of cognitive evaluation theory and basic psychological needs theory within SDT, while engagement is analyzed in terms of emotional, behavioral, and cognitive dimensions. The study involved 610 fifth and sixth-grade elementary school students who completed a questionnaire. Through analysis, it was found that teachers' perception of autonomy support instruction plays a pivotal role in satisfying students' psychological needs in the classroom, subsequently influencing their level of engagement. Drawing from these findings, this abstract offers recommendations for enhancing future elementary foreign language classes by adopting relevant perspectives from the self-determination framework.

Key Words: motivation, self-determination theory, engagement, English education in elementary schools

1. はじめに

2020 年度からの小学校外国語の教科化を受けて、小学校現場では、高学年において週 2 時間の外国語の授業が行われている。『新学習指導要領』（文部科学省，2017）においては、「知識・技能等」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の育成が目標とされ、児童の「主体的・対話的で深い学び」を通した授業展開が求められている。特に、児童の主体性および自律性の育成は、小学校外国語において急務であり、多くの教員が外国語の授業の中で、どのように児童の自律的な学習を促すかについて検討している。この分野の研究として、染谷（2022a）は、中学生を対象に調査研究を行い、教師の自律性支援の認知が心理的欲求の充足を媒介として、生徒の授業へのエンゲージメントを促進するということを明らかにしている。また、外国語が教科化される前の研究ではあるが、小学校高学年児童を対象とした研究で、教師の自律性支援の認知が心理的欲求充足を媒介としてエンゲージメントを予測することを明らかにした研究も存在する（Oga-Baldwin et al., 2017）。

しかし、小学校において外国語が教科化されることが決まって、具体的に教科としての学習が始まってから、上記の内容を検討した研究はまだないのが現状である。そこで、本研究では、小学校外国語の教科としての授業を受けた児童を対象にアンケート調査を行うことにより、教師の自律性支援の認知、心理的欲求の充足、およびエンゲージメントの関連性を明らかにしようとする。

2. 先行研究

(1) 動機づけ

心理学的に「動機づけ（Motivation）」とは行動や心の活動を、開始し、方向づけ、持続し、調整する、心理的なプロセスであると言及される（上淵，2012）。「動機（Motives）」は動機づけのプロセスを構成する一要素にすぎないとされる（Reeve, 2018）。動機とは動機づけのプロセスを生じさせて持続させるものの総称であり、要求、欲求、認知、情動などの変数を含むとされている。つまり、動機には状況変数と特性変数が存在し、状況によって値が変化する変数と特定の値を取りやすい傾向を示す変数がある。本研究における動機とは前者に相当し、授業という状況により値が変化する動機を扱う。

1) 自己決定理論（Self-determination Theory; SDT）

自己決定理論とは Deci and Ryan（1985）により提唱されたものであり「成長と統合に向かう自己の傾向性および、より統合された自己の感覚を発達させていく傾向性を生得的に備えているという生命論的視座に立脚した動機づけの考え方」（鹿毛，2013, pp.182–183）であるとされる。この理論には、現在 6 つの下位理論が存在するとされ、その中で「土台」として位置づけられている考え方が基本的心理欲求理論である（Ryan & Deci, 2017）。

2) 自律性支援（Autonomy Support）

自己決定理論のミニ理論の一つに「認知的評価理論（Cognitive Evaluation Theory）」が存在する。認知的評価理論では外的な状況（フィードバック、コミュニケーション、報酬など）が

個人の自己決定と有能さの認知を媒介として内発的動機づけを規定するとされ、個人内に「内部情動的」と「内部制御的」という対象的な心理状態が存在することを仮定している (Deci & Ryan, 1985)。内部情動的な心理状態では、環境と効果的な相互交渉を行った結果としての事象の理解や技能の上達によって得られた有能感や満足感が体験されるが、内部制御的な心理状態では、圧迫感、緊張、不安などの感情体験を伴うとされる (鹿毛, 2013)。

認知的評価理論の観点から「動機づけスタイル (Motivating Style)」を検討すると、内部情動的な心理状態を体験させる「自律性支援 (Autonomy Support)」指導と内部制御的な心理状態を伴わせる「統制 (Controlling)」指導が存在するとされる (Reeve, 2018)。

現在までの研究において、「自律性支援」指導は自律性の欲求充足のみでなく、有能性、関係性の欲求充足にも正の影響を及ぼすという考え方が存在する (Skinner et al., 2009)。日本の英語教育環境下では、染谷 (2021b, 2022a) は、中学生及び高校生に調査研究を行い、Skinner et al. (2009) と同様に、生徒の自律性支援指導の認知が、自律性・有能性・関係性の欲求の充足に正の影響を及ぼすことを明らかにしている。

3) 基本的心理欲求 (Basic Psychological Needs)

自己決定理論の根底となるミニ理論の一つとして、「基本的心理欲求理論 (Basic Psychological Needs Theory)」が存在する。基本的心理欲求理論とは、「自律性 (Autonomy)」「有能性 (Competence)」「関係性 (Relatedness)」の欲求充足が、内発的動機づけの促進、人間の成長、統合的な発達、ウェル・ビーイング (Well-being) のために不可欠であるという考え方である (Ryan & Deci, 2017)。

染谷 (2020) は、鹿毛 (2013, p. 184) 及び廣森 (2006, p. 13) をもとに、英語教育における3つの心理的欲求充足に関して、次のように言及している。

- ・ **自律性の欲求充足**：行為を自ら起こそうという傾向性を指し、学習者が自律的に英語学習に取り組みたいと感ずること
- ・ **有能性の欲求充足**：環境と効果的に関わりながら学んでいこうとする傾向性を指し、学習者が英語ができるようになりたい、あるいは英語の授業内容を理解したいと感ずること
- ・ **関係性の欲求充足**：他者やコミュニティと関わろうとする傾向性を指し、学習者が教師や仲間と互いに協力的に英語学習に取り組みたいと感ずること

上記の3つの心理的欲求充足が内発的動機づけやエンゲージメントを予測しているということが近年の研究で明らかにされている (染谷, 2021a, 2022b)。

(2) エンゲージメント

学習者の成果としての「エンゲージメント (Engagement)」とは「心理的没入」と表現でき、興味や楽しさを感じながら気持ちを集中させ、注意を課題に向けて維持するような「熱中」する心理状態である (鹿毛, 2013)。エンゲージメントは「行動的エンゲージメント」「感情的エンゲージメント」「認知的エンゲージメント」に分かれているとされる (Raschly & Christenson, 2012)。「行動的エンゲージメント」とは授業をはじめ、学習場面や学習課題における関与、努力や持続性、忍耐を含む概念とされる (梅本ら, 2016)。「感情的エンゲージメント」とは興味、退屈、不安、楽しさといった学習者の感情的反応に関する概念とされる (梅本ら,

2016)。さらに、「認知的エンゲージメント」とは洗練された深い学習方略（精緻化など）の使用や、自己調整方略（プランニングなど）の使用といった認知的な参加における概念であるとされる（Reeve, 2018）。

（3）動機づけ要因とエンゲージメントの関連性

動機づけ要因とエンゲージメントの関連性を検討した研究としては、自律性支援と心理的欲求充足、及びエンゲージメントの関連性を検証した研究が存在する。Jang et al. (2012) は韓国人の大学生 500 名に対して、アンケート調査を行い、「自律性支援」→「自律性の欲求充足」→「エンゲージメント」というような媒介モデルが存在することを明らかにした。また、Jang et al. (2016) の研究結果では韓国人英語学習者 366 名を対象にアンケート調査を行い、「自律性支援」→「心理的欲求充足」→「エンゲージメント」という媒介モデルの存在を明らかにした。

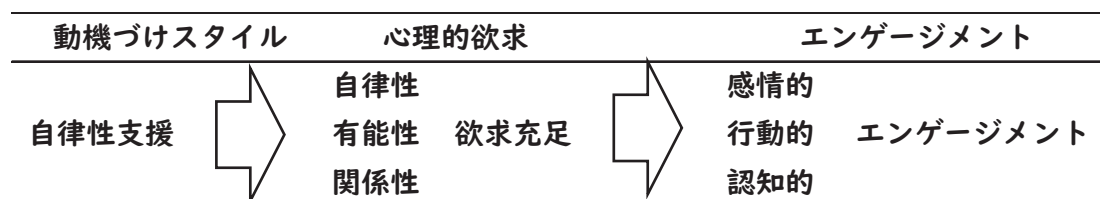
日本においても自律性支援、心理的欲求充足及びエンゲージメントの関連性について検証した研究が行われている（e.g. 染谷, 2021a, b, 2022a, b, 2023; Someya & Obermeier, 2023）。

染谷（2021a）は、大学生を対象に自律性支援指導の認知が心理的欲求充足を媒介として内発的動機づけを予測するプロセスについて明らかにした。さらに、染谷（2021a）の研究を発展させた染谷（2022a）の研究では、中学生を対象にアンケート調査を行い、自律性支援指導の認知が心理的欲求充足を媒介にエンゲージメントを予測するという結果を明らかにした。さらに、染谷（2022b）の研究では、大学生を対象にアンケート調査を行い、自律性支援指導の認知が学生の心理的欲求充足を媒介としてエンゲージメントを予測することを明らかにしている。

上記の研究から明らかになったことを図 1 に示す。

図 1 動機づけスタイル、心理的欲求及びエンゲージメントの関連図

（染谷, 2022a, p. 84 より引用）



3. 研究の目的と方法

（1）研究の目的

本研究の目的は、小学生の英語学習動機づけが授業へのエンゲージメントに及ぼす影響を明らかにすることである。

具体的に以下の 2 つのリサーチ・クエスチョン（RQs）を設定し、検討を試みる。

RQ1：児童の自律性支援の認知、心理的欲求充足及び授業へのエンゲージメントの間には正の相関が存在するか。

RQ2：児童の自律性支援の認知、心理的欲求充足と授業へのエンゲージメントの因果関係はどのようなものであるか。

(2) 研究の方法

1) 参加者

本研究の参加者は、千葉県 A 市の 2 つの小学校に在籍する高学年（5, 6 年生）児童 610 名であった。本研究に参加した児童は 2018 年度から 1 年間または 2 年間の教科としての外国語の授業を受けてきた。授業の教材は、『We Can! 1, 2』が用いられた。授業は英語専科の教員が中心に行い、担任及び ALT が適宜補助する形で行われた。

2) 質問紙

アンケート調査は、2020 年 3 月に行われた。倫理的配慮として、成績に影響しないこと、アンケートに回答する強制はしないこと、回答は自由意志であるということを最初に明記及び口頭により説明した。

アンケートは動機づけスタイル（自律性支援）と心理的欲求（充足）及びエンゲージメント（感情的・行動的・認知的）に関する質問項目で構成されるものを使用した。

「自律性支援」に関するアンケート項目は、Reeve and Jang (2006) をもとに染谷 (2022a) で作成されたものを用いた。また、心理的欲求充足の質問項目に関する項目は染谷 (2020) により作成された質問項目を小学生に改良したものを用いた。最後に、エンゲージメントに関する項目は、染谷 (2022a) を参考に作成された。アンケートは 4 件法（4：とてもそう思う、3：そう思う、2：あまりそう思わない、1：全くそう思わない）を用いた。質問項目と記述統計量を Appendix に示す。

得られたデータは IBM SPSS Statistics Base 及び Amos Ver.29 を用いて分析された。分析方法として記述統計、クロンバック α 係数、相関係数、共分散構造モデリングによるパス解析 (SEM) を用いた。

4. 研究の結果と考察

(1) 本研究の分析結果

まず、要因の信頼性係数及び相関係数を算出し、各要因間の関連性を検討する。その後、共分散構造モデリングによるパス解析を行うことにより RQ1 と RQ2 を明らかにしようと試みた。

1) 信頼性係数と相関係数

各要因の信頼性を検討するために、信頼性係数（クロンバック α 係数）を算出した。自律性支援 ($\alpha = .843$)、心理的欲求充足 ($\alpha = .865$)、エンゲージメント ($\alpha = .923$) のすべての要因において、受け入れられる数値を示した。そこで、各要因間の関連性を検討するために相関係数を算出した。その結果を表 1 に示す。

表 1 相関係数と信頼性係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3
1. 自律性支援	2.928	0.681	($\alpha = .843$)	.463**	.665**
2. 心理的欲求充足	2.640	0.618		($\alpha = .865$)	.741**
3. エンゲージメント	2.919	0.653			($\alpha = .923$)

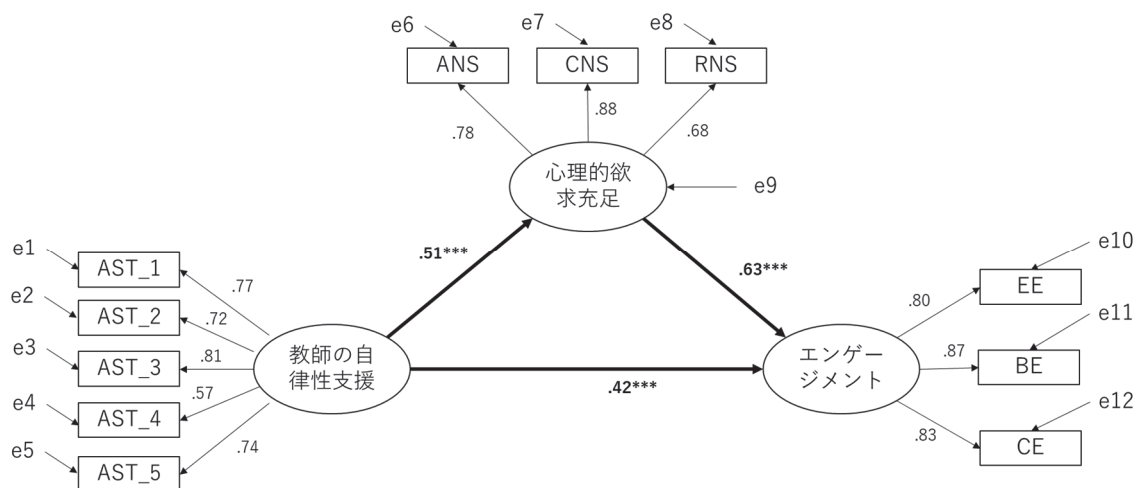
$N = 610$, ** $p < .01$

相関係数を算出した結果、自律性支援と心理的欲求充足 ($r = .463, p < .01$)、エンゲージメント ($r = .665, p < .01$)、心理的欲求充足とエンゲージメント ($r = .741, p < .01$) の間に中程度から強い正の相関が見られた。

2) 因果関係の検討（共分散構造モデリング）

先行研究から「自律性支援指導の認知は心理的欲求充足を媒介にエンゲージメントを予測すること」（図 1）が想定されるため、上記を検討するために共分散構造モデリングによるパス解析（SEM）を行った。分析の結果、図 2 のような結果が得られた。

図 2 SEM の結果



Note. AST: 自律性支援、ANS: 自律性の欲求充足、CNS: 有能性の欲求充足、RNS: 関係性の欲求充足、EE: 感情的エンゲージメント、BE: 行動的エンゲージメント、CE: 認知的エンゲージメント

モデル適合度指標: $X^2 = 275.104$, $df = 41$, $X^2/df = 6.710$, $RMR = .039$, $GFI = .921$, $AGFI = .873$, $CFI = .938$, $RMSEA = .097[.086, .108]$, *** $p < .001$

(2) 結果の考察

RQ1 及び RQ2 について上記の 1) 及び 2) の結果より考察を行う。

信頼性係数 α を計算した結果、 $\alpha = .843-.923$ の間の値をとっており、いずれも受け入れうる値を示したと考えられる。つまり、今回の調査で用いた質問項目の信頼性は十分受け入れうるものであったと考えられる。

RQ1 に関して、相関分析の結果より、先行研究と同様に、自律性支援、心理的欲求充足、エンゲージメントとの間には、有意な正の相関が存在することが明らかとなった。このことにより、日本の小学校における英語教育（学習）環境下でも、「自律性支援、心理的欲求充足及びエンゲージメント」という各要因が、相互に影響し合っていることが考えられる。

次に、RQ2 について考察を行う。

RQ2 について、SEM の結果より、「自律性支援の認知→心理的欲求充足→エンゲージメント」という媒介モデルの存在が示された。モデル適合度指標に関しても、 $CFI > .90$, $0 < RMSEA < .10$ であることから、受け入れうる数値を示したと考えられる。

この媒介モデルは中学生の英語学習の意識を調査した染谷（2022a）でも存在が確認されており、小学校での英語学習者を対象とした本研究でも類似した結果が得られたと考えられる。教師の自律性支援の認知から心理的欲求充足へのパスは $\beta = .51$ ($p < .01$) であり、心理的欲求充足からエンゲージメントへのパスは $\beta = .63$ ($p < .01$) であり、教師の自律性支援の認知からエンゲージメントへのパス ($\beta = .42$, $p < .01$) より大きいものとなった。つまり、自律性支援の認知は直接エンゲージメントを予測するというよりはむしろ、心理的欲求充足を媒介としてエンゲージメントを正に予測するということが明らかになった。この結果は、染谷（2021b, 2022b）の高校生の英語学習環境の調査と同様の結果を示しており、小学生の英語学習環境でも同様のことが言えると考えられる。上記を考慮に入れると、小学校での英語学習環境でも、教師の自律性支援指導はエンゲージメントの向上に有意義なものであると考えられる。したがって、小学校での英語教育において、教師が自律性支援指導を心がける必要性があるということである。

ここからは教師がどのような視点を持つことで自律性支援指導をすることができるかをまとめる。教師の自律性支援はスキルであり、教師が磨くことができる（Reeve, 2018）。スキルとしての自律性支援指導の視点として、「①学習者の視点に立つ」「②学習者の興味・関心を引き出す」「③ニーズに合わせた学習活動の提案」「④合理的な説明」「⑤否定的な感情を認識する」「⑥学習者を奨励する言葉を用いる」「⑦（学習者が準備ができるのを）忍耐強く待つ」といった7つの視点が重要とされる（Reeve & Shin, 2020）。英語の授業において、染谷（2023）が言及するように、英語教師は学習者がどのような視点で英語学習を捉え、どのような内容に興味関心を有するのか、どのような学習活動を行いたいのかと言った学習者のニーズを分析し、支援を行うことが求められる。また、なぜその英語学習が必要なのか、どのように学習したら言語学習にとって効果的かなど合理的に学生に説明していく視点も必要とされる。さらに、学習者が英語学習に対して持つ否定的な感情を受け入れ、それを改善していくように教師がポジティブな言葉を用いるように心がける必要がある。最後に、学習者によっては目標とされるレベルの英語学習の準備ができていない状態の学生もいることを受け入れ、できる限り準備が整うまで忍耐強く待つといった視点も重要であると言える。

今後、小学校英語の授業内で教員が前述の7つの視点を有し、授業内で実践していくことで、より授業内での心理的欲求が充足されエンゲージメントの促進をすることができると考えられる。

5. おわりに

本研究では、小学校外国語の授業における、教師の自律性支援の認知と心理的欲求充足がエンゲージメントに及ぼす影響を分析した。分析の結果、いくつかの先行研究と同様に、「教師の自律性支援の認知→心理的欲求充足→エンゲージメント」という媒介モデルの存在を明らかにすることができた。このことから、児童に対して教師が自律性支援指導を意識しながら授業を行っていくことの重要性が指摘された。今後の小学校外国語の授業において、教師が自律性支援指導を意識し、心理的 3 欲求の欲求を充足させ、授業にエンゲージさせて行くことによって、児童の英語力の伸張およびコミュニケーション能力を育成することができる可能性がある。

注) 本稿は、APA manual 7th edition に準拠して執筆しております。

謝辞

調査にご協力くださった、千葉県 A 市の 2 つの小学校の児童および教職員の方々に感謝を申し上げます。

参考文献

- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination theory*. Plenum Press.
- Jang, H., Kim, E. J., & Reeve, J. (2012). Longitudinal test of self-determination theory's motivation mediation: Model in a naturally occurring classroom context. *Journal of Educational Psychology*, 104 (4), 1175–1188.
- Jang, H., Kim, E. J., & Reeve, J. (2016). Why students become more engaged or more disengaged during the semester: A self-determination theory dual-process model. *Learning and Instruction*, 43, 27–38.
- Oga-Baidwin, W. L. Q., Nakata, Y., Parker, P. D., & Ryan, R. M. (2017). Motivating young language learners: A longitudinal model of motivational development in elementary school foreign language classes. *Contemporary Educational Psychology*, 49, 140–150.
<https://doi.org/10.1016/j.cedpsych.2017.01.010>
- Reschly, A. L., & Christenson, S. L. (2012). Jingle, jangle, and conceptual haziness: Evolution and future directions of the engagement construct. In S. L. Christenson, A. L. Reschly, & C. Wylie (Eds.), *Handbook of research on student engagement* (pp. 3–20). Springer.
- Reeve, J. (2016). Autonomy-supportive teaching: What it is, how to do it. In C. W. Liu, K. C. J. Wang, & R. M. Ryan. (Eds). *Building autonomous learners: Perspectives from research*

- and practice using self-determination theory* (pp. 129–152). Springer Science + Business Media Singapore 2016.
- Reeve, J. (2018). *Understanding motivation and emotion* (7th edition). John Wiley & Sons, Inc.
- Reeve, J., & Shin, S. H. (2020). How teachers can support students' agentic engagement. *Theory Into Practice*, 59, 150–161. <https://doi.org/10.1080/00405841.2019.1702451>
- Reeve, J., & Jang, H. (2006). What teachers say and do to support student's autonomy-supportive and controlling styles of teaching: Opposite or distinct teaching styles? *Swiss Journal of Psychology*, 74 (3), 141–158.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*. Guilford Press.
- Skinner, E. A., Kindermann, T. A., & Furrer, C. J. (2009). A motivational perspective on engagement and disaffection: Conceptualization and assessment of children's behavioral and emotional participation in academic activities in the classroom. *Educational and Psychological Measurement*, 69, 493–525.
- Someya, F., & Obermeier, A. (2023). Autonomy support, psychological needs satisfaction, academic engagement, and achievement in English learning: Generating a mediation model. *LET Kansai Chapter Collected Paper*, 21, 19–38.
- 上淵寿 (編著) (2012).『キーワード動機づけ心理学』金子書房.
- 梅本貴豊・伊藤崇達・田中健史朗 (2016).「調整方略, 感情的及び行動的エンゲージメント, 学業成果の関連」『心理学研究』87, 334–342.
- 鹿毛雅治 (2013).『学習意欲の理論 動機づけの教育心理学』金子書房.
- 染谷藤重 (2020).「高校生の英語における基本的欲求充足尺度の作成の予備調査ー内発的動機づけに及ぼす影響ー」『上越教育大学教職大学院研究紀要』第7巻, 217–223.
- 染谷藤重 (2021a).「英語授業者の動機づけスタイルが学習者の内発的動機づけに及ぼす影響: 自己決定理論を用いたアプローチ」『中部地区英語教育学会紀要』第50号, 221–226.
- 染谷藤重 (2021b).「高校生の英語の授業への動機づけと英語学習へのエンゲージメントとの関連性の検証ーSGH 指定校に関するケース・スタディーー」*JAFLE Bulletin*, 第24号, 61–79.
- 染谷藤重 (2022a).「英語教師の自律性支援がエンゲージメントに及ぼす影響: 中学校英語授業における心理的欲求を媒介として」『京都教育大学紀要』第141号, 81–91.
- 染谷藤重 (2022b).「教師の動機づけスタイルがエンゲージメントに及ぼす影響: 英語の授業における心理的欲求を媒介として」『中部地区英語教育学会紀要』第51号, 33–40.
- 染谷藤重 (2023).「自律性支援・基本的心理欲求及び行為主体的エンゲージメントの関連性の検証: 自己決定理論における二重過程モデルを通して」『中部地区英語教育学会』第52号, 85–92.
- 廣森友人 (2006).『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』多賀出版.
- 文部科学省 (2017a).『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語・外国語活動編』開隆館出版.

Appendix

アンケート項目と記述統計量

項目	質問項目	<i>M</i>	<i>SD</i>	歪度	尖度
AST(1)	先生はわかりやすい説明をしてくれる	2.97	0.865	-0.570	-0.290
AST(2)	授業のペースはちょうど良い	2.91	0.887	-0.472	-0.498
AST(3)	先生は自分が何をすべきかを指示してくれる	2.98	0.846	-0.551	-0.258
AST(4)	先生はたくさんの英語を話す	3.20	0.807	-0.789	0.069
AST(5)	先生は自分の興味をそそることをしてくれる	2.58	0.935	-0.082	-0.867
ANS(1)	すすんで自分の意見や考えを自由に言えている	2.42	0.887	0.204	-0.673
ANS(2)	人から言われずに、自分で決めて活動している	2.53	0.877	0.051	-0.704
ANS(3)	自分らしくふるまっている	2.73	0.884	-0.206	-0.697
CNS(1)	自信を持って活動できる	2.57	0.954	0.069	-0.962
CNS(2)	達成感（できたという気持ち）を感じることができる	2.96	0.962	-0.539	-0.726
CNS(3)	自分は英語ができると思う	2.15	0.922	0.394	-0.695
RNS(1)	クラスの人と仲良く活動できている	3.17	0.828	-0.838	0.190
RNS(2)	先生やクラスみんなは自分のがんばりを認めてくれている気がする	2.31	0.887	0.123	-0.756
RNS(3)	クラスの人、自分の発表・発言をきちんと聞いてくれている	2.92	0.807	-0.515	-0.063
EE(1)	英語の授業では、ウキウキした気分になる	2.25	0.946	0.318	-0.796
EE(2)	英語の授業では、楽しめている	2.70	0.957	-0.203	-0.912
EE(3)	英語の授業に興味を持っている	2.68	0.964	-0.159	-0.957
EE(4)	英語の授業で、知らなかった言葉や文化を学べてうれしい	2.82	0.982	-0.356	-0.915
BE(1)	英語の授業で、活動に参加できている	3.03	0.828	0.996	13.563
BE(2)	英語の授業で、先生の話や活動に集中している	3.02	0.792	-0.567	0.008
BE(3)	英語の授業で、活動に最後まで取り組んでいる	3.15	0.774	-0.718	0.234
BE(4)	英語の授業で、自分の言いたいことが英語で伝わるように頑張っている	3.04	0.822	-0.572	-0.196
CE(1)	英語の授業で、自分の言いたいことを英語で伝えようとしている	2.90	0.879	-0.380	-0.619
CE(2)	英語の授業で、相手の言いたいことをわかろうとしている	3.16	0.812	-0.778	0.145
CE(3)	英語授業で、先生や友だちの話をわかろう（理解しよう）としている	3.20	0.805	-0.913	0.510